

# シェーカーズ

初期アメリカの創造的文化として

長 島 敏 子

はじめに

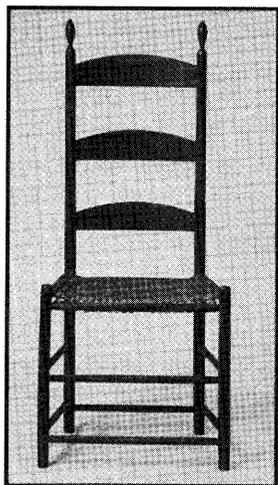


写真1 シェーカーチェア

オークションに出品されると、数百万、数千万の値段が付く家具がある。素朴な手作りで機能性本位、何の装飾も付かない、シンプルな木製の椅子。製作されてから200年の年を重ねても、寸分の狂いも生じない完璧な職人技術。シェーカー家具と呼ばれるこれらの家具を作成したのは、18世紀のアメリカに舞い降りた、シェーカーズ (Shakers) と呼ばれた人たちで、完璧なクラフトマンシップで家具や道具を作り、多くの発明品と改良品を考案した人々ある。

彼らは1774年に誕生した「キリストの再臨信者の合同教会」(The United Society of Believers in Christ's Second Appearing) の信者で、元々特別な技術を持っていた人たちではない。「手は労働に心は神に」(Hands to work and heart to God) の教えの下、理想社会 (Utopia) 建設のため、共同生活を実践していた彼ら自身のコミュニティー生活のため、創意工夫と努力を重ねていった結果、数々の発明、発見、発展が生まれたのであった。それらは生活の細々した工夫、考案のみに止まらず、家具作り、住宅作り、村 (コミュニティー) 建設にも至り、又、土壌作りから、有機農法での野菜作り、種作り、食材、料理法の開発、そして、糸を紡ぎ、布地を作り、衣服も作る。完璧な自給自足の生活を成し遂げ、活発な販売活動も行った。彼らのアイデアや発明品などは、多くが特許を取らず一般社会に広く提供され、現在の我々の生活に受け継がれているものも数多い。

彼らはまた、完璧な平和主義者であり、性、人種を超えた平等主義者であり、理想主義者であった。ラルフ・エマソン (Ralph Waldo Emerson) やヘンリー・ソロー (Henry David Thoreau) など、アメリカンルネッサンスの哲人たち

にも影響を与えたスローライフの実践者であり、一時期は数千人の信者を有し、ニューイングランド地方<sup>1)</sup>を中心に十数か所の村で活発な活動を展開していた。初期アメリカ社会において、最も注目に値する文化・宗教運動の一つであるといえる。

信者数は、1860年頃の約6,000人を頂点として、その後徐々に減少の一途をたどり、村もひとつひとつと閉鎖されていった。現在は高齢な信者が僅かに住むメイン州のサバスデイ・レイク村 (Sabbathday Lake)<sup>2)</sup> 1ヵ所を残すのみとなっている。

この非常にユニークな人々の目的と彼らが残した「物」について紹介すると共に、果たして、彼らの運動は成功だったのか、目的は達成されたのか、衰退の原因は何なのか、様々な視点から考察してみたい。

## 第1章：シェーカーズ誕生に至るまでのヨーロッパ事情

15世紀から16世紀にかけて、ヨーロッパでは羅針盤や大型船舶の造船技術など海洋航海技術の発達と共に、当時の大国<sup>3)</sup>が、金や香料などの交易権を得るため、新海洋ルートの開発にしのぎを削っていた。スペイン<sup>4)</sup>によるアジアへの新航海路確立の試みが、アメリカ大陸の発見に繋がり、世界が球形になっていることは認めざるをえない事実となり、地の果てには暗黒の無限が広がっているという中世以来の世界観や宗教観を根底から覆した。新貿易航路の開発とそれに伴う新大陸の発見、新技術や新兵器の開発は、ヨーロッパ中心の世界観、政治観、精神観、経済観を大きく変えるきっかけになった。

時を同じくして、ヨーロッパで宗教改革が起こったわけだが、この動きも大航海時代の幕開けと大いに関係している。人々や文化がより交わるようになると、書物などの翻訳の需要が高まり、供給も増えた。聖書も例外ではなくなった。聖書に書かれた神の言葉も、教会で聖職者から教えて頂くものであり、世俗の人々が直接触れることのできない聖域であった。しかし、聖書の翻訳などが進むにつれ、それまで一方通行であった聖書の解釈にも、諸説あらわれるよ

うになり、教会や聖職者の在り方に疑問を持ち異議を唱える人々が出てくるようになった。その結果、カトリック教会から離れ、聖書に基づいたキリスト教会（プロテスタント）創設の動きが出てくるようになる。それらプロテスタント教会の3大派が、ルターによるルーテル教会、カルヴィンなどによる改革派教会、ヘンリー8世によって始まったイギリス国教会である。<sup>5)</sup>

しかしながら、時が経つとプロテスタント革命は不十分であったと主張し、プロテスタント教会では真の信仰は貫けないとする人々が、神と聖書を根本とする純粋な信仰を実践しようと新諸派を作り、プロテスタント教会からの分離独立を望むようになる。この動きは教会が国家権力と結託していたイギリスで顕著に現れ、福音よりも律法を重んじる律法主義のイギリス国教会から離れようとする新諸派の人々は、国家から弾圧され迫害を受けたため、新天地を求めアメリカに移住することになる。1620年、メイフラワー号でアメリカに渡り、イギリス人によるアメリカ建国の基礎を築いた分離派 (Separatist)<sup>6)</sup>、その後マサチューセッツ湾岸植民地を建設する清教徒 (Puritan)、そしてバプティスト (Baptist)、クエーカー (Quaker)、フレンチ・カミザール (French Camisard)、ユニタリアン (Unitarian)、メソジスト (Methodist) 等々が、分離独立していた。

この新宗教改革時に誕生したクエーカーズから分離したのがシェーカーズで、シェーキング・クエーカーズ (Shaking Quakers) とも呼ばれた。シェーカーズとクエーカーズは教義など多くを共有しているので、ここでクエーカーズのことも説明しておく。

クエーカーズは1947年、その長年の平和運動に対してノーベル平和賞が贈られた宗教団体で、17世紀中頃に設立された精神性を重んずる新諸派の一つである。

クエーカーズは正式名を「キリスト友会」(Religious Society of Friends) と言い、1652年イギリスで、ジョージ・フォックス (George Fox) によって創設された。一般的には「キリスト教プロテスタント、フレンド派 (クエーカーズ)」のような形態でその名は普及している。クエーカーの呼び名は、創始者フォッ

クスが神名冒瀆罪で裁かれた時、担当判事が、祈りの時に身を震わせ踊る信者の姿に「クエーカーズ」<sup>7)</sup>と蔑んで呼んだのが最初である。フォックスや会員多くのがこの呼び名を嫌がったにもかかわらず、クエーカーという俗称は定着した。

クエーカーには全信者に向けた独自の経典や正式な教義などはないが、最も中心にある考えは「内なる光」(Inner Light of Christ)である。これは全ての人に神が内在し<sup>8)</sup>、各自が祈ることにより神を知ることができることとされ、「信仰的証し」(Witness)となって現れる。神と個人は直接の関係にあり、教会の介在が無くても、「神を知る」ことは可能である、との考えから、聖職者が介在する儀式や祈りの形は否定している<sup>9)</sup>。信者は「内なる光」に継続的に導かれることを信じ、神の啓示はキリスト教の聖書に制限されることのない「継続的啓示」(continuing revelation)として理解されている。

クエーカーズの集会は、聖霊の声に耳を傾ける場所である。会堂の中で、信者がぐるりと円を描いて腰かけ、じっと頭を垂れて祈ったり、瞑想したりしている。何も無く静かに終わる場合もあるが、神の声を聞いた人が次々に立ち上がって自らの体験を語り、活発な話し話合いに発展する場合もある。初期の時代には、「神の御言葉に身を震わせよ」(Tremble at the Word of the Lord)という聖書の言葉を重んじ、信者が「神を知る」ことによる高揚感、絶頂感で身を震わせ、踊り、歌いだしたため、既存の教会や地域社会とトラブルになることも多かった。

クエーカーズの一部がアメリカに渡ったのは1656年、先に渡り既にマサチューセッツ湾岸植民地を建設していたピューリタン(Puritan)に受け入れられず、迫害を受けたため、1681年信者でイギリスで有力者であったウィリアム・ペン(William Penn)が、当時のフロンティアの最前線、辺境の地を開拓しクエーカーズが安全に暮らし信仰を守れる土地とした。その地はペンの名前から、ペンシルヴァニア(Pennsylvania)と名付けられた。今のペンシルヴァニア州である。この地は、クエーカーズと同じように、イギリスでの宗教改革によって、分離派生した宗教的少数派の入植を受け入れ、宗教的寛容の地とな

った。<sup>10)</sup>

教育を受ける機会が、まだ一部の限られた男子に限定されていた時代にあっても、クエーカーズには、娘も息子と同じように教育した家庭が多く、スーザン・アンソニー (Susan Anthony)<sup>11)</sup> など、アメリカ初期の女性教育者や女性リーダーにクエーカーの人が多い、またクエーカー教会が運営する学校「フレンド・スクール」(School of Friends) は評価が高く、クリントン大統領が、当時学齢期にあった一人娘、レイチェルさんの教育に選んだことでも、話題になった。東京にも1887年に創立された中・高一貫の女子校(普連土学園)が港区にある。日本では新渡戸稲造や、現天皇の教育係として来日した、ヴァイニング婦人 (Elizabeth J.G. Vining) が信者として知られている。

## 第2章：シェーカーズとは

「シェーカーズ」(Shakers) の正式な名称は「キリストの再臨信者の合同教会」(The United Society of Believers in Christ's Second Appearing) である。この名称からも明白のように、キリストの再来を信じる「至福千年期」(The Millennium<sup>12)</sup>) を信仰する人たちで、1774年にイギリスのクエーカー派から起こった。俗称のシェーカーズ(振動する)は、クエーカーと同じように、礼拝の時、霊の高揚で体を激しく揺らし踊る信者の祈りの姿に由来する。シェーキング・クエーカーとも呼ばれる。

提唱者アン・リー (Ann Lee) と8人の賛同者が新天地での理想郷(ユートピア)の建設を目指し、アメリカに渡ってから、本格的な活動が開始された。

シェーカーズの創始者アン・リーはマザー・アン (Mother Ann) と尊敬を呼ばれた女性で、1736年にイギリスのマンチェスターで鍛冶屋の娘として生を受ける。読み書きはできなかったと言われている。アン・リーが22歳の時、一家はワードリー夫妻が率いるシェーキング・クエーカー<sup>13)</sup>に参加する。アン・リーは26才で鍛冶職人のアブラハム・スタンデリン (Abraham Standerin) と結婚し4人の子供を授かるが、どの子も病気や虚弱で、失ってい

る。

34才の時、神からの「特別な啓示」(a special manifestation of Divine Light)を受ける。マザー・アンと呼ばれるようになるのはそれ以後であった。「アメリカを目指せ」という神の啓示により、1774年5月10日8人の信者ととともにアメリカ移住を決行し、ニューヨーク州の北西のニスカイエナ(Niskayena)、現在のウオーターヴリート(Watervliet)に入植する。おりしも、アメリカ植民地は本国イギリスからの独立の機運で、戦闘的ムードに包まれていた。マザー・アンの一行はイギリス人でその上反戦主義者で、踊ったり歌ったり、激しく身を震わす人たちで、不可解な危険グループとみられ、迫害を受け、好奇な目にさらされたりしながらの入植であった。指導者マザー・アンは1784年に亡くなったため、実際の活動年数は短いものであったが、彼女のカリスマ的布教はアメリカ社会と宗教界に永遠に消えることのない影響を与えた。

シェーカーズの教義は、クエーカー教と基本的には同一で、礼拝の形は、神と個人の直接の関係を重視し、聖職者の介入はない。クエーカーにはなくシェーカーズ特有なのは「非婚主義」と土地や財産の共有に基づいた「共同生活」である。シェーカーズは「千年至福説」を信じ、共同生活の中で「教会の規則と指示」(Orders and Rules of the Church)を忠実に実践することにより、正義と平和が世を支配する至福の時代のために地球上に平和・平等・愛に満ちた天国を建設しようとした。<sup>14)</sup>

マザー・アン自身はシェーカー・コミュニティの建設を見ることはなかったが、彼女の死後、忠実にその教えを引き継いだ人々によって発展し、信者数は南北戦争(The American Civil War)<sup>15)</sup>直前の1860年ころには6,000人以上、コミュニティもニューイングランド地方を中心に20か所以上に上った(図1)。

マザー・アンと18人が到着した当時のアメリカでは、13植民地にイギリス本国からの独立の機運が高まりつつあった。<sup>16)</sup>1763年、イギリスは7年に及ぶフレンチ・インディアン戦争(The French and Indian War)<sup>17)</sup>に勝利し、アメリカ大陸における領土を拡大させたものの、戦争による莫大な赤字を抱えていた。

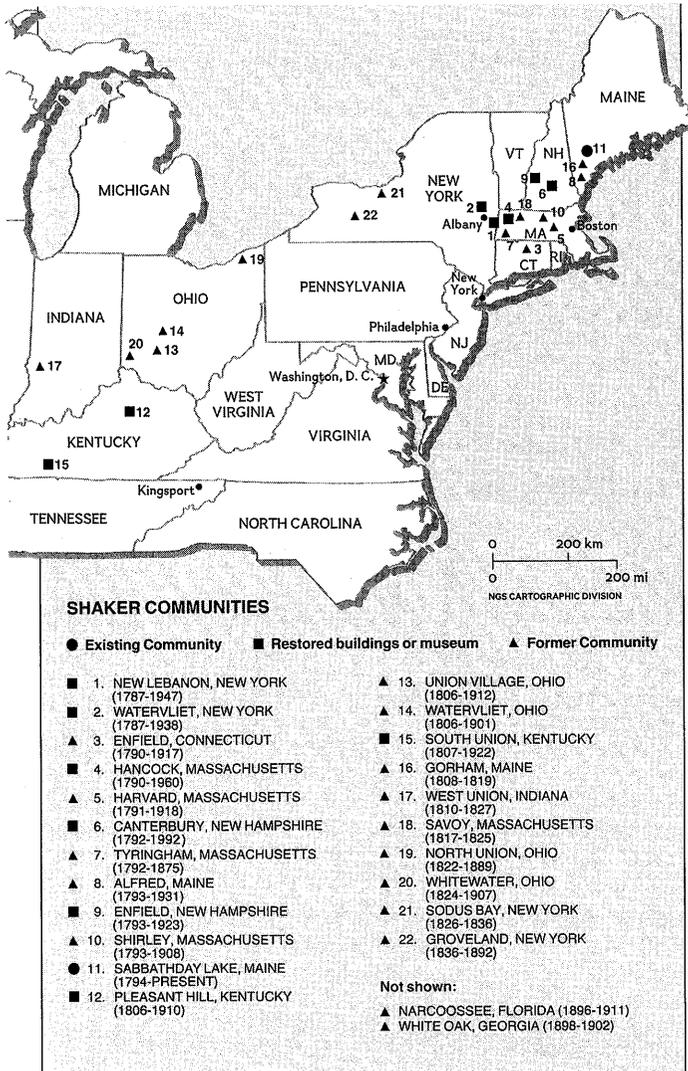


図1 コミュニティーの分布地図

●現存している

■信者は絶えたが、保存され、一般に公開されている

▲跡地

イギリスはこの解決策をアメリカ植民地に向けたのである。1764年には砂糖税法、1765年の印紙税法が課せられ、植民地には「代表なければ課税なし」(No taxation without representation)の声と共にイギリス政府に対する不満がたかまり、1773年にはボストン茶会事件 (Boston Tea Party)<sup>18)</sup>が起こった。イギリスはボストン港を封鎖し軍隊を駐留させ、マサチューセッツ植民地弾圧を試みたが、1775年、植民地側が武器弾薬を隠していたボストン郊外のコンコードで、イギリス軍を待ち受けたミニッツマン (minuteman)<sup>19)</sup>と呼ばれる植民地側兵士との交戦により、独立戦争の火ぶたが切られた。<sup>20)</sup>

シェーカーズは平和主義を貫き、独立戦争の兵役に応じなかったため、投獄されたが、その後の彼らの変わらない平和行動は、アメリカ政府が認めるところとなり、南北戦争時はリンカーン大統領に請願書<sup>21)</sup>を提出し、兵役義務回避が認められた。しかし、シェーカー村に立ち寄る兵士は人道的立場から北軍も南軍も同じように迎え、食事や休息を提供した。

マザー・アンの死後、1787年には最初のシェーカー・コミュニティがニューヨーク州のニュー・レバノン (New Lebanon) に完成し、それ以降、シェーカーズは共に働き祈ることのできる、コミュニティでの共同生活をめざすことになる。信者は100人位のファミリー (Family) と呼ばれるグループに分けられ、それぞれのファミリーが家と店を持ち、男女2人ずつの年長者がファミリーメンバーを教え東ねていた。コミュニティは外部に閉鎖されていたわけではないが、コミュニティの外はワールド (World) と呼ばれ、ビジネスなどワールドとの交渉事は、その担当者が行った。住まいは中央で男女に分かれており (写真2)、入口や階段も別々で (写真3)、祈りの時も男女は分かれて座った。信者は互いを「兄弟」(brothers)「姉妹」(sisters)と呼び合い、多くの場合、労働も男女分かれておこなった。コミュニティ内は完全な平等社会で、仕事の種類や内容での上下関係は皆無であった。シェーカーズでは神は両性であり、男女の完全な平等は必然のことである、と考えた。



写真2 住居：入口が2ヶ所 男・女別に分かれている

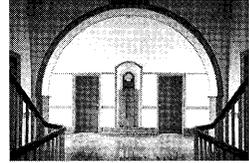


写真3 住居内部ホール

18世紀のイギリスでは女性の権利、特に既婚女性の権利は制限されていた。アメリカもイギリスのそれを受け入れていたため、既婚の女性は男性の所属物的扱いであった。既婚女性は夫の許可がなければ契約書を取り交わしたり、土地を所有したり売買したり、法的に訴えを起こしたり、起こされたり、遺言を書いたりすることはできなかった。もし女性に収入があれば、それらは全て夫のものとなり、婚姻以前から所有していた不動産や財産も夫のものとなった。夫婦が離婚に至った場合はほぼ例外なく子供の親権は父親に渡り、母親の面会は許されなかった。ところが未婚の場合は財産の所有や経営者になることができ、納税の義務も果たせた。参政権と公職に就く権利は、未婚・既婚にかかわ

らず女性には与えられず、立法権は男性が握り、社会は絶対的な男性優位の状態であった。

シェーカーズの衰退の最大原因といわれる非婚・禁欲主義の教えだが、全ての罪を排除すると、アダムとイブの原罪に行きつくことになり、人間の罪の根源を取り除かない限り天国の建設はないとの考えに基づいている。また、既婚女性の権利はほぼ無いに等しい18世紀には、彼らの真の平等社会は非婚であったからこそ可能だったのかも知れない。1989年、ナショナル・ジオグラフィック・マガジンのインタビューに、メイン州にあるサバスデイ・レイク村のシスターフランシスが答えている。「私たちシェーカーズにとって、非婚の教えは、神からの贈り物です。この教えが個人的な愛に束縛されることなく、万人に慈愛の心を持てるように私たちを解放してくれました。」<sup>22)</sup>と答えている。

神の愛は何人にも普遍である。人間も配偶者間や家族間という狭い愛でなく、神への不変の愛と全ての人への人間愛を貫こうとしたのがシェーカーズであった。

シェーカーズは孤児院から多くの子供を迎え養育し、また色々な理由から、育てられないと村に連れてこられた子供たちも、快く迎えファミリーの一員として受け入れた。しかし、そうした子供たちが大きくなって村から出ることを望めば、本人の意思を尊重しそれを認めた。<sup>23)</sup> 孤児の数が多く、社会も不安定で経済状態も良くない時代は、シェーカー村での生活は快適だったが、1845年頃を境に、一般社会の安定とともに多様な選択肢が生まれ、シェーカー村で育った子供たちも、村の生活よりも、外の世界に住むことを選択していくようになった。また、大人の信者にも同じように寛容であったため、冬の間だけ食事と屋根を求めてやってくる、冬だけのわか信者も多く、彼らは春になると出て行った。シェーカーズはそれらを十分承知で、彼ら「冬だけ信者」(Winter Shakers)も迎え入れた。新入信者数が減少し、信仰を捨て村を出る人数が多くなれば、自ずとシェーカー村の人口は減り続けることになる。

シェーカーズの名の由来にもなっている、信仰の精神的高揚、歡喜の表れで

ある、ダンスや歌を伴う彼ら独特の祈りの形は1930年頃までには殆ど消え、現在にも伝承されているのは、単調な音階の歌に分かりやすい振りがついているもので、日本のわらべ唄を彷彿とさせる。<sup>24)</sup>

シェーカーズの村は人里離れた場所に作られたが、外部に閉ざされていたわけではない。外部社会との交流は認められていた。哲学者ラルフ・エマソン、作家ナサニエル・ホーソン (Nathaniel Hawthorne)、ハーマン・メルヴィル (Herman Melville) など、何度か村を訪れていたことが記録に残っている。<sup>25)</sup>

エマソンは1820年代から繰り返しシェーカー村を訪れ、弟や友人への手紙や出版物に書き記し、講演の題材にもしている。1842年9月にはホーソンと一緒にマサチューセッツ州にあった、ハーヴァード村を訪れている。この時の様子はエマソンもホーソンもそれぞれが日記に書き留めている。ホーソンはシェーカーズに入信の意思を強く持っていたようだが実現せず、後に超越主義者が始めた、ユートピア主義的実験農場ブルック・ファームに参加している。

メルヴィルは彼の代表作、白鯨 (Moby-Dick; or, the Whale) の執筆中、当時彼の住まいの近くにあった、ハンコック・シェーカー村 (Hancock Shakers) を訪れ資料などを持ち帰っている。

### 第3章：シェーカーズが作ったもの

シェーカーズは普通の人々だが、環境が彼らを芸術家にしたといえる。一般社会に生活していれば当然起こりうる煩わしい事柄が彼らには無かった。「家」に住み、毎日祈り、「衣服」と美味しい「食事」と日々の「予定」と「仕事」があった。より多くの収入を得るため、その場間に合わせの手抜き仕事をする必要もなく、仕事場と上質な材料があり、料理から大工仕事に至るまで、どの分野の仕事でもその担当者は「完璧」をめざした。他の何よりも、「労働」が信仰の証であり、神の栄光に奉仕することだった。<sup>26)</sup>

シェーカーズの完璧な生き方は、コミュニティーの穏やかな美しさ、家具や工芸品の優雅さ、そして、敬虔な信仰者で、勤勉で、慈愛に満ちた信者の姿に

見ることができる。

## 家具

シェーカー家具といえば、何よりも椅子が有名であるが、戸棚、タンス、テーブル、また、数々の工夫を凝らした、裁縫台やベッドも生産した（写真4）。

シェーカーチェアは、他の家具と同様、自分たちが使う物として製作されたのが始まりだが、1813年には、外部への販売が記録されている。販売開始



写真4 シェーカー家具

以来、その細部にわたるまでの完璧な作り、質素で優雅で上品なスタイルのシェーカーチェアは、類似品が出るほどの人気を得る。すべて手作りで、各パーツにも余り汎用性を持たせなかったため、注文に生産が追いつかない状態であったが、1884～1885年には、マウント・レバノンで3000脚の椅子の生産・販売が記録されている。

基本形は写真1のようなスラットバック椅子<sup>27)</sup>で、サイズは7種類ほど、その応用編のロッキングチェア、アーム付きチェアも生産した。また、年を重ねていくファミリーメンバーのために車椅子や4本足の杖なども考案した。

シェーカーチェアの独特な優雅さは、生産者が、「いつか天使が舞い降りて座る椅子」と信じて製作しているからである、といわれている。75年ほどは、各村の収益の多くを担っていた椅子製造だが、技術を継承する男性の信者数の減少で、20世紀初期には生産の終了を迎える。<sup>28)</sup>

シェーカーズは誠実さと徹底した職人技を持ち、アメリカにおける椅子生産のパイオニアであり、革新的な椅子作りを成功させ、長期にわたり生産・販売を維持した功績を、大きく評価されている。

## ペグレール

コミュニティ建設や建物のエクステリアに多くの工夫を成し遂げているシェーカーズだが、かれらの創意工夫は建物のインテリアにも多い。その一つ、最近日本でも注目されているものにペグレール（ペグボードともいう）がある。

主にコートかけ用にニューイングランド地方の一般家庭でも、裏口のドアの近くやクローゼットの中等などに使われていたが、このペグを芸術の域まで引き上げたのが、シェーカーズである。シェーカー村では、部屋や廊下部分のすべての壁にペグレールが取り付けられている（写真5）。場所によ

っては二重・三重になっている。衣服のような軽いものではなく、椅子や戸棚などを吊り下げたの使用に耐えるだけの強度とデザインがシェーカーのペグレールである。

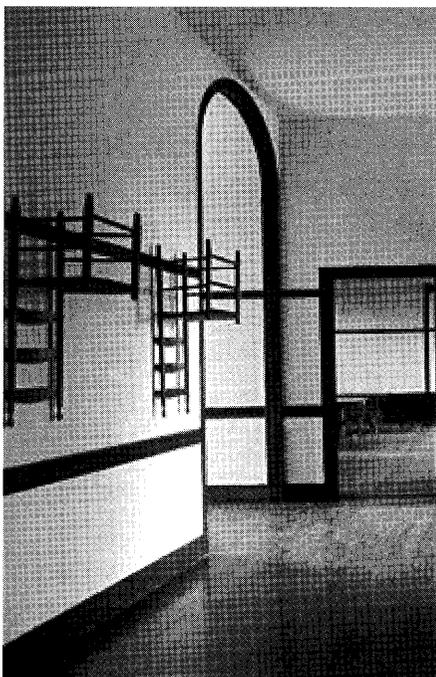


写真5 ペグにイスが掛けられている廊下

## 園芸用種

日本でも、ホームセンターや園芸店には多くの花や野菜の苗や種が並んでいる。小さな封筒状の紙袋に入った種は我々にも大変身近であるが、これを最初に作り販売しただのが、シェーカ



写真6 種販売の看板

ーズである。

シェーカーズが扱うまで、アメリカには種を小売する産業は無かった。1784年フィラデルフィアの会社が農場相手に種のバルク販売を始めていたが、樽や麻の大袋での販売で、営業用のみであった。

シェーカーズは少量の種を紙製の封筒に入れ、一般家庭用に販売を始めた(写真6)。彼らが開発したのは、家庭菜園で育てる少量の種の販売という概念だけではなく、親種を収穫するための土壌作りから、良質の種の収穫、梱包、販売、また、遠方への出荷方法まで、製造から販売までの一貫したシステムであった。

種作りの過程で多くの農業機械も作成改良されていった。種を入れた紙袋も初期は質素な茶封筒のようなものだったが、表にイラストを入れたり、裏に種の植え方を印刷したりと工夫発展していった。種の種類も野菜から花まで多種にわたり、丁寧なマニュアル本も作られた。品質の良さと、軽く輸送に適した形体から多くの顧客を得たが、南北戦争の勃発とともに南部への販売が滞り、また大量生産大量販売をする会社が現れるに至り、競争力を失っていった。

### ハーブ・薬草

シェーカーズの村では、村内の医者病気の治療に当たった。彼らシェーカードクターは治療技術と薬の調合の巧さで、一般社会でも高い評価を得ていた。18世紀末のアメリカでは外科的手術か化学的に調合された薬が医療として一般的に受け入れられていた。それらの薬の中には、現在ではその毒性や副作用から使用されなくなっている水銀やアヘンなども含まれていた。<sup>29)</sup>しかしシェーカーズの医療は自生の薬草や自前の蒸留所で自然素材から作られた、エッセンシャル・オイル、チンキ剤、軟膏が主なものだが、その種類は数十種類にも及び、詳しい解説書と共に一般社会にも販売された。

1822年頃ニューイングランドでのハーブ運動と相まって、シェーカーズの村では60種類以上の医療用ハーブの生産から販売までをこなすようになる。

シェーカーズにとって人間が所有するものは全て神からの贈り物である。そ

それぞれの人の能力も勿論神からの贈り物であり、それらが無駄にすることなく、努力し伸ばし、世のため人のために使わなければいけないと考えた。

### 野菜・果物

シェーカーズが作った新野菜や果物類は20種類以上にのぼる。代表的なのはトウモロコシと林檎である。「乾しトウモロコシ」は実が青い内に収穫し、乾燥させて販売した、栄養分も形も崩れにくく、ミルクやスープで戻すと、甘みも濃厚で一番美味しい食べ方になる。「缶詰めのスイートコーン」は現在の我々の献立にも利用されているが、茹でたコーンを穂軸から削ぎ取り缶詰めにしたものだ。シェーカーズはコーンを穂軸から削ぎ取るために道具を開発し、より早く衛生的に作業が進むように工夫した。

リンゴは生の果物としても販売したが、アップルソース<sup>30)</sup>、アップルサイダー<sup>31)</sup>、リンゴ酢、ジャム、リンゴバターなどにも加工した。「アップルソース」や「アップルサイダー」と聞くとニューイングランド地方を連想するほど、今でもこの地方の代表的な食べ物だ。「リンゴ一個で医者知らず」(An apple a day keeps the doctor away!)という標語が生きているように、アメリカ人にとって身近で大切な果物である。リンゴの芯抜きや皮むき機もシェーカーの創意工夫の一貫として作られている。

### ワイン

アメリカにはワイン用の葡萄がなかなか根付かなかった。ブドウの木は生育を抑制するだけの寒い冬(氷点下にはならない)、成長を始めるのに適した穏やかな春、開花と実の育成を促す十分な日照量のある暑い夏、完熟させて豊かな香りをもたらす秋、このような四季が揃うことが必要だ。現在はカリフォルニア州のナバ溪谷が、天候的に最適な地としてアメリカワインの生産地として有名だが、極寒の冬と短い夏のニューイングランド地方はワインの生産には不適な所だった。数々の試行錯誤の末、イザベラ種というワイン用のぶどうの生産を実現させ、シェーカーワインはアメリカ産ワインの先駆けとなった。

## その他

シェーカーズはその他にも、数々の発明品を創出した。洗濯機、高効率の薪ストーブ、煙突のメタルカバー、回転式オープンなどは、コミュニティの生活の中で、労働効率を高めるために工夫・開発された。勿論現代の我々もその発展モデルを使用している。車椅子、杖、車付ベッド、簡易トイレなどは、年を重ねた高齢や病気のメンバーのために考案された。フラット箒や木製の洗濯バサミ、カーペット叩き<sup>32)</sup>は21世紀の我々の生活にも、ほとんど形を変えずに残っている。

男性信者の減少に伴い、女性が主に生産していたシルク地やウール地の衣服や人形などが、シェーカー・コミュニティの晩年の生活を支えた(写真7)。

シェーカーズを貫いているのは、マザー・アンの教え、「手は労働に心は神に」(Hands to work, and hearts to God)。規律を大切に、労働は尊いものとし、厳格で質素な生活を信条とした。シェーカーズにとって労働は信仰そのものであり、いかなる時も完璧に忠実に実行された。



写真7 シェーカーの女たち

## おわりに

シェーカーズはイギリス人女性、アン・リーによって始められたが、その実質的な活動は、彼らがアメリカに移住してからであった、ゆえにアメリカで生まれ完成された宗教といえる。既存の宗教から派生しているが、独自の宗教観を作り上げた。シェーカーズの信仰の根底は、新約聖書に予言されている至福千年期(The Millennium)であり、神の再来を信じユートピア建設を目指していた。創始者マザー・アン・リーの教え「手は労働に、心は神に」(Hands to Work and Hearts to God)を実践した勤勉かつ優秀な労働者であり技術者であった。

共同生活を実践した共同体、コミュニティーは、平等な大きなファミリーとして機能し、戦争や暴力を否定し、原罪を否定し、性や人種の平等を実践し、ファミリーが協力しあうことにより自給自足の生活は安定していた。また、一般社会に生産物を販売することで、経済的にも自立していた。同時代にユートピア建設を目指したグループの中では一番の成功例といえる。

思想的には、当時のアメリカ社会の支配的な考えに反対の改革派であり、女性解放運動、平和運動、奴隷解放運動など、多くの改革運動と協力関係にあった。逃亡奴隷を匿った記録も残っている。

優秀で勤勉な労働者であった彼らは、農業生産物から椅子や家具などの手工芸品製作に、非凡な才能を発揮した。現在高い評価を受けている彼らの建築物、家具、工芸品は「シンプル」、「実用的」、「高い職人技術」というシェーカーズ独特の個性と美しさに満ちている。余分な飾りは全くないすっきりしたライン、清潔さ、統一性は彼らの製作物全てに一貫して現れている。彼らの残した物すべてが、彼らが活動した地域、ニューイングランド文化その物である。

1774年のアメリカ東北部に入植以来、わずか8人ではじまったシェーカーズは約100年の間成長を続け、20数か所のコミュニティーに6,000人の信者が生活するまでになったが、南北戦争後の急激な経済社会の変化に対応できず、その後は徐々に数を減らしていった。南北戦争の北軍の勝利は、「金メッキ時代」と言われる戦後の急激な工業化経済を生み、大量生産により、安価な物が大量に流通するようになると、一つ一つ手作りのシェーカーズの製作物は販路を失っていった。彼らのあまりにも実直な生き方は、時代と共に変化する器用さとはほど遠く、臨機応変に立ち回ることができなかった。また、アメリカ社会の経済的繁栄は個人の自由と可能性を助長し「アメリカン・ドリーム」という言葉に集約されるような、魅力溢れる競争社会が展開されるに至った。シェーカー村での共同生活が理想郷の魅力を失う結果になっていった。

住民を失ったコミュニティーはその後順次閉鎖され、一部は博物館や歴史資料館として保存され、観光客や研究者に開放されている。彼らの残したものは、清掃の行き届いた構内に今も寸分の狂いもなく存在し、訪れる人々を魅了し続

けている。

彼らはこの地球上に天国を築こうとした人たちであった。しかし、その試みは一時期には成功したように思われたが、彼らの理想主義は時代の変化に対応しきれず、衰退の一途をたどっている。

現在はメイン州のサバスデイ・レイク村に、高齢な信者がわずかに残るのみで、新入信者はもう何年も現われていない。

皮肉にも、シェーカーズが消えようとしている今、彼らの生き方が再注目され始めている。高度の文明社会が様々なひずみを吸収しきれなくなり、人間の心が、社会が、悲鳴をあげているからだ。文明の恩恵を受けすぎってしまった我々には、彼らのようなストイックな生き方はできないかもしれないが、彼らが残してくれた、シェーカーズ流の生き方、生活の知恵は、大いに学び直せるのではないかと思う。

5

注)

- 1) アメリカ東北部に位置するメイン、ヴァーモント、ニューハンプシャー、マサチューセッツ、コネチカット、ロードアイランドの6州をさす。イギリス人による開拓が成功した最初の地域で、今でも、プロテスタント倫理 (Protestant Ethics) が人々の生活に色濃く残る。
- 2) アメリカ東部の最北州であるメインのニュー・グロスターに残る1,800エーカーのコミュニティ。1794年の開村以来、信者数も少なく、経済的にも最も貧しい村であったといわれている。サバスデイとは「安息日」の意義。キリストの復活を記念する安息と礼拝の日。
- 3) ポルトガル (Portugal)、スペイン (Spain)、イギリス (England) 等
- 4) 1487年、ポルトガルによるアフリカ大陸喜望峰経由でインドに到達するルートが開拓されると、列強国スペインは、1492年、イタリア人船乗りコロンブスを雇い、独自の交易路開拓にのりだした。コロンブスはアジアへの航海の途中、新大陸を発見する。
- 5) ルターやカルヴィンの改革は宗教的なものだったが、イギリス国教会は国王ヘンリー8世の離婚問題が直接の原因で、政治的、経済的な動機も強かった。
- 6) 分離派は、イギリスを追われ、宗教的寛容の地であったオランダに移り住み、信

仰の自由と豊かな生活を求めたが叶わず、更なる新天地を求めてアメリカに渡った。聖なる目的のために旅をしたため、巡礼始祖 (Pilgrim Fathers) と呼ばれる人たちである。

- 7) Quakersのquakeは「震える、震動する」という意味。
- 8) “The belief that God exists in all people.”
- 9) 現在、アメリカのクエーカー教は3派に分かれ、礼拝の仕方にも多少の違いが生じており、牧師をたてている派もある。
- 10) ペンシルヴァニア州には、現在でも、科学技術を否定した独特の生活様式を保っているアーミッシュ (Amish) やメノナイト (Mennonites) が信仰生活を営んでいる。
- 11) (1820-1905) アメリカ最初の女性人権運動家の一人。スタントン (Elizabeth C. Stanton) と共に、女性の権利 (主に参政権) 獲得のために一生を捧げた。
- 12) 終末思想の一種。新約聖書ヨハネの黙示録 (Revelation) 20節に記されているように、キリストが再臨し、最後の審判の前日までこの世を統治するという、千年間。正義と平和が世を支配する至福の時代。
- 13) クエーカー教会にフレンチ・カミザール教会の影響を受けたワードリー夫妻 (Jane and James Wardley) 率いるグループ。1747年、クエーカーズから分離独立しシェーキング・クエーカー (Shaking Quakers) となる。
- 14) 18～19世紀のアメリカには、数多くのユートピア思想に基づいた取り組みがあった。代表的なのは、エマソン (Ralph Waldo Emerson) をリーダーとするニューイングランドの超越主義者 (Transcendentalists) の実験農場、ブルック農場 (Brook Farm) 1841年～1847年、その外にはラピタ (The Rappites) 1814年頃、オネアイダ・コミュニティ (The Oneida community) 1833年～1881年、アマナ・コロニー (The Amana Colonies) 1842年～1932年がある。シェーカーズは先駆者であり、最も長期にわたり村を継続運営した成功者たちでもある。
- 15) 1861年～1865年。アメリカ合衆国 (北部州) と合衆国から脱退したアメリカ南部連合 (Confederate States of America) (南部の11州) との、アメリカを2分した戦争。奴隷制度をめぐる対立が戦争のきっかけではあるが、早くから産業資本社会を築いて保護貿易を望んでいた北部と、奴隷制に依存して、産業構造の変革に向かわず、綿花の外国輸出のため自由貿易を望んでいた南部との経済上の摩擦が原因。双方合わせて、死者61万5千人という犠牲者をだした。1865年4月9日バージニア州アポマトックスで、南軍総司令官リー将軍が、北軍総司令官グラントに降伏し、終戦をむかえた。
- 16) アメリカ革命 (American Revolution)。フレンチ・インディアン戦争が終結した

1763年以降、イギリス本国の植民地に対する税制政策などに植民地側が抵抗し始めた時から、独立戦争を経て、パリ条約によって新共和国が誕生する1789年までを指す。

- 17) 1756年～1763年、アメリカ大陸における植民地争奪戦争。イギリスおよび植民地軍と、フランスと先住民の連合軍との間で戦った。イギリス軍と植民地軍が勝利し、1763年のパリ条約でカナダ及びミシシッピー川以東の領有権を確保した。7年戦争 (Seven Years' War) ともいう。
- 18) 茶税に反対するため、先住民の扮装をした愛国派60人が、ボストン港に停泊中の東インド会社の船から、茶箱を盗み海中に投棄した事件。
- 19) 1分で用意ができることから、その名が生まれたといわれている、即時召集に備えて待機していた民兵。特に独立戦争の勇者を指す。
- 20) 植民地建設からアメリカ独立までの詳細は長島 (Pp.118~119) を要参照
- 21) ケンタッキー州のサウス・ユニオン村 (So. Union, Kentucky) の代表だったジョン・ランキン (John N. Rankin) が書いた嘆願書は心打つ名文であった。
- 22) "To a Shaker, celibacy is a given. Says Sister Frances Carr of Sabbathday Lake, Maine: "Celibacy frees us to be able to love, and I'm speaking of Gospel love - to love everyone and not be restricted by personal love." (P.314 NGM)
- 23) 1861～1900年にかけて、マウント・レバノン村で育てられた197人の子供の内、成人後も村に残ったのは1名だけだった。(p.314, NGM)
- 24) DVD *Shakers, Burns*
- 25) Pp.186-201, Morse
- 26) P428 Stein
- 27) Slat back chair 椅子の背柱の間に水平に数枚の横木をはめた背もたれ椅子
- 28) 1900年、マウント・レバノンでの男性信者は35人、40%は16才以下か60才以上という状態であった。(p.132 Miller)
- 29) 「若草物語」の作者、ルイザ・メイ・オルコットも投棄からの水銀中毒に苦しみ、著作活動の間も健康を回復することはなかった。
- 30) Apple sauce リンゴの砂糖煮。すったリンゴを少量の砂糖とともに煮込んだもの。赤ちゃんの離乳食、その他おやつやデザートとして食す。
- 31) Apple cider リンゴ汁。リンゴの搾り汁で、発酵させないもの (sweet cider) と発酵させたもの (hard cider) とがある、通例アメリカでは前者の意で、子供から大人まで楽しめる秋の味覚である。
- 32) カーペットたたき (Carpet and Rug Beater) は殆どそのままの形で、「布団たたき」として、日本にも流通している。

- 写真1 The Canterbury Shaker Village Brochure, Canterbury Shaker Village, Inc.,  
Canterbury, NH 03224, U.S.A.
- 図1 *National Geographic Magazine*, September 1989, p.310
- 写真2 <http://www.nps.gov/history/nr/travel/shaker/ect.htm>
- 写真3 <http://www.nps.gov/history/nr/travel/shaker/index.htm>
- 写真4 <http://www.seacoastnh.com/det/res/shaker4.jpg>
- 写真5 *National Geographic Magazine*, September 1989, p.305
- 写真6 *Inspired Innovations: A Celebration of Shaker Ingenuity*, p.33
- 写真7 <http://www.seacoastnh.com/dct/res/shaker.jpg>

### 参考文献

- Miller, Stephen M. (2010) . *Inspired Innovations: A Celebration of Shaker Ingenuity*.  
Hanover and London: University Press of New England
- Morse, Flo. (1980) . *The Shakers and the World's People*. Hanover and London:  
University Press of New England
- Nagashima, Toshiko. (2002) . *Plymouth, Massachusetts 1621: Natives, Colonists and  
Thanksgiving Day*. The Journal of Soka Women's College Vol.32. Tokyo: Meiwa  
Publishing
- Newman, Cathy. (1989) *The Shaker's Brief Eternity*. Pp.302-325. National Geographic  
Magazine. Washington, D. C. : National Geographic Society
- Shea, John G. (1982) *The American Shakers and their Furniture*. New York: Van  
Nostrand Reinhold Company
- Stein, Stephen J. (1992) . *The Shaker Experience in America*. New Haven and London:  
Yale University Press
- Tabuchi, Yoshio. (2002) . *Cold Mountain Living Style*. Tokyo: Shogakukan
- Thoreau, Henry D. (1854) . *Walden; or, Life in the Woods*. Boston: Ticknor and Fields  
Edison, NJ: Castle Books
- Burns, Ken. (1989) . *The Shakers*. PBS DVD Video

<http://www.nps.gov/history/nr/travel/shaker/index.htm>

<http://www.shaker.lib.me.us/about.html>

<http://www.pbs.org/kenburns/shakers/timeline/>

<http://www.shakervillageky.org/>

<http://www.shakers.org>

[http://www.essortment.com/all/theshakersreli\\_rggy.htm](http://www.essortment.com/all/theshakersreli_rggy.htm)

<http://en.wikipedia.org/wiki/shakers>

<http://www.rootsweb.ancestry.com/~quakers/shakers.htm>

<http://shakerworkshops.com>